

近大・森本教授の

痛み学

入門講座

◆ 32 ◆



もりもと・まさひろ 平成元年、大阪医科大学大学院(麻酔科学専攻)修了。同大講師を経て、8年に近畿大学医学部麻酔科講師。22年から現職。医学博士。日本ペインクリニック学会理事。

落語の枕に「葛根湯医者」というのがある。「先生、頭が痛いんです…」

「頭痛だな、葛根湯をお上がり」「おなか痛いんです…」

「腹痛だな、葛根湯をお上がり」といった具合にである。今回は、この「葛根湯」に代表される漢方薬について紹介する。

2千年以上昔の中国で生まれた中医学(中国漢方)が、5〜6世紀にわが国に伝わり、その後独自に発展してきた。したがって、これらには「日本漢方」「和漢医薬学」との呼称が用いられており、すべての総称が「漢方」であると理解してほしい。この漢方の考え

に基づいて作り出された薬が漢方薬である。

痛みの治療に広く用いられている西洋の薬は、原因が明らかな痛みには良い効

果を挙げるが、痛みの原因が分からなかったり、慢性化した場合などには、十分な効果を示さなかったりすることがある。このような

体質改善により病気を治す

西洋医学

漢方薬

漢方



イラスト 森井真理

方では病気は「体のゆがみ」によって起こるとし、そのゆがみを治すことを主目的としている。つまり、

体質を改善することで、病気を根本から治し、さらには予防しようと考えているのだ。

さて、漢方薬とは、自然の草根木皮から成る「生薬」(この生薬を「味」と呼ぶ)をいくつか組み合わせ

せたものであり、その生薬の組成比が厳格に決められている。たとえば、前述の葛根湯(「風邪」のひき始めや「肩こり」に用いる)には、七味の生薬(葛根、大棗、麻黄、甘草、桂皮、芍薬、生姜)が一定の比率

で含まれているが、これらうち葛根はこりをほぐし、頭痛を取り去り、麻黄は発汗を促して発熱を軽快し、咳を鎮める作用を有しているのだ。

漢方薬の処方にあたっては、中医学的な四診(望診、聞診、問診、切診)によって情報を集め、たうえ

で、「虚実」「陰陽」「寒熱」「気血水」といった独自の概念でその整理を行い、患者さん一人一人の「証」を決定する。たとえ

ば、虚実(病気に対するその人の抵抗力、体力の充実度を指すもので、「虚証」は腹筋が柔らかく、脈が弱く、疲れやすい状態、「実証」は体力が充実して、腹筋の緊張が強く、脈が力強い状態、その中間が「中間証」である。このように漢方薬の処方を決定するにあたっては、症状や体格、胃腸が丈夫か否か、どこに冷感があるか、などきめ細かな配慮が必要となる。

きつと、あなたの痛みに合った漢方薬があるはず。それには専門の医師に相談してもらおうことである。

(近畿大学医学部麻酔科 教授・漢方指導医 森本昌宏)

第1、3土曜日に掲載します。

大阪

地域ニュース